

世界文学を学ぶ会 第4回 シェイクスピアの作品から

12月17日(金) 午後1時30分～3時 アキシマエンシス校舎棟 201号室

「ロミオとジュリエット」

ベローナの舞台へ世界からラブレター



ジュリエットのバルコニーでのつぶやき

「あなたは何故ロミオ様なの？」

ああ、なんという悲劇！

ロミオは毒薬、ジュリエットは短剣で



ベネチア

「ベニスの商人」の裁判所

運河の都の不思議な景観



ローマ

シニアの休日 in Rome

アン王女と新聞記者の後を追う



「ハムレット」

ヘルシンギーのクロンボー城

シェイクスピアは来っていない！？

「To be or not to be ～」をどう訳す？

美しいデンマークの街角から



お知らせ

参加ご希望の方は人数掌握が必要なため、1週間前(12月10日)までに下記のメールまたは電話でお知

せください。なお、この後に予定の「戦争と平和」「罪と罰」「レ・ミゼラブル」「三銃士」「車輪の下」「ライン川紀行」は諸般の事情によりしばらく延期します。

清水 武 メール：[donky17@nifty.com/](mailto:donky17@nifty.com) 電話・ファクス：042-541-4787



(赤字はパワーポイントで映し出した写真の説明や言葉です)

タイトル

皆さまこんにちは。お忙しいなか本日の文学講座にご来場いただきましてありがとうございます。今日ここにいらしてくださっている皆さまは、昭島市の国際交流部会、イキニコ英会話教室、シルバー人材センター、瑞雲中学校、つつじが丘北のシニアクラブ、地元地域の方々など、私が個人的にお世話になったりお付き合いいただいている案内を差しあげた方々です。会場内にお知り合いの方もいらっしゃるかと思います。この場がそんな出会いや交流の場にもお役に立てば幸いです。

これからパワーポイントで写真上映のためのパソコン操作がありますので、ここからは座って話をさせていただきます。

この講座の第1回目は「ドン・キホーテ」、2回目は「風と共に去りぬ」、3回目は「赤毛のアン」を取り上げてきましたが、今回は世界の文学史上に圧倒的な影響を及ぼしてきたシェイクスピアの作品を取り上げることにいたしました。

「ドン・キホーテ」の作者セルバンテスの作品は「スペイン文学の原点」とも言われてきましたが、シェイクスピアの作品は「英文学の原点」とも言われ、大学の英文学部でも必ずと言ってよいほど取り上げられている作品です。

今回はそれらの作品の中から日本で一番よく読まれ、また映画でも鑑賞されている「ロミオとジュリエット」、それに四大悲劇の中でも最も有名な「ハムレット」を取り上げてまいります。

イタリアの地図

最初の「ロミオとジュリエット」はイタリアの地方の都市ベローナが舞台。またすぐ東のベネチアは同じくシェイクスピア作「ベニスの商人」の舞台です。また首都ローマはシェイクスピアの作品ではありませんが、不朽の名作映画「ローマの休日」の舞台です。イタリア訪問の際にはこれらの都市も訪れたので、その二つの作品についても、さわりと写真だけでもご紹介しようと思っております。

一方、「ハムレット」の舞台はデンマークのヘルシンゴーにあるクロンボー城です。現場でお城の警備員と案内人からは「エッ」と驚くような意外な言葉も聞いてきました。後ほどお伝えしてまいります。

それでは最初に「ロミオとジュリエット」から。

余りにも有名な悲劇の恋愛小説。ここにいらっしゃる大部分の皆さまが本を読んだか映画をご覧になっているかと想像します。本を読まれた方？(挙手)、映画をご覧になった方は？(挙手) 大勢いらっしゃいますね。でも、かなり前のことだと思いますし、初めての方のためにも、最初に簡単にストーリーのおさらいをしておきます。

シェイクスピア

舞台は14世紀のイタリアの都市ヴェローナ。モンタギュー家とキャピュレット家は代々対立していました。

モンタギュー家の一人息子ロミオは気晴らしにと、友人達とキャピュレット家のパーティに忍び込んだところで、家の一人娘ジュリエットに出会い、たちまち二人は恋におちます。二人は修道僧ロレンスの元で秘かに結婚。ロレンスは二人の結婚が、両家の争いに終止符を打つきっかけになることを期待したのです。

しかしその直後、ロミオは街頭での争いに巻き込まれ、キャピュレット夫人の甥ティボルトを殺してしまふ。このことからヴェローナの大公（今の市長みたいなものです）からロミオは追放の罪に処される。一方、悲しみにくれるジュリエットは大公の親戚のパリスと結婚する事を命じられます。

ジュリエットに助けを求められた修道僧ロレンスは、彼女をロミオに添わせるべく、仮死の毒を使った計略を立てた。だが、この計画は追放されていたロミオにうまく伝わらなかった。そのためジュリエットが死んだと思ったロミオは、彼女の墓参りに来たパリスと決闘し殺してしまい、彼女の墓の脇で毒薬を飲んで自殺した。その直後に仮死状態から目覚めたジュリエットも、最愛の夫が死んでいるのを見てロミオの短剣で後追い自殺をする。事の真相を知って悲嘆に暮れる両家は、ついに和解する。——といったところですね。

ベローナ

「ロミオとジュリエット」の舞台ベローナ——街全体が世界遺産に指定されているため、大型バスは石畳の道路を傷めるといふことで中に入っていくことはできません。観光客は徒歩による見学となっていました。訪れた日はあいにく小雨が降っていて、傘をさしながらの濡れた石畳の散策となりました。先ずはお目当ての物語の舞台キャピュレット家へ。4 幅ほどの石畳の道路から門を入った途端、「エッ これは何？」と目を見張ったのです。

通路の両側の壁には高さ 3 メートル、長さ 10 メートルほどにわたって、メモ書きみたいな小さな紙から手紙のようなものまで隙間なく重なって貼られていたのです。

ガイドによれば、世界から訪れた恋人たちのラブレター、愛の言葉を貼り付けたものだといいます。その数、数百枚、いや数千枚になるように思われました。

通路に続く奥には幅 10 ほど、奥行き 15 ほどの小石が敷きつめられた中庭がありました。暗くなりかけた雨の日の夕方 5 時というのに観光客の出入りでいっぱいです。

目の前に一軒の大きな家があり、家の壁の高さ 5 ほどのところにはバルコニーが突き出ていました。ジュリエットがロミオに恋の独白をしたというバルコニーです。意外に小さく質素なものに思えました。

夕闇のなか雨が少し降ってきました。白い斑点はその雨です。

ベランダでのジュリエットの独白はこの物語で最も有名なシーンです。原作はいろんな翻訳家が翻訳していますが、ここでは集英社版の訳をとりあげていきます。

シェイクスピアの作品は大部分が戯曲です。ジュリエットとロミオの二人の会話を会場の何人かに舞台上で演ずるつもりで読んでいただくようお願いしました。こちらに来た途端に依頼したので面食らった方もいらっしゃるかと思います。でもありがたいくも引き受けてくださった。周りの皆さまもその辺をご理解いただき応援していただくとありがたいです。

最初はジュリエットがベランダでつぶやいた言葉です。中世の英語なので難しいです。私にもわからないところもありますが頑張っていきましょう。

じゃあ（ ）さん、お願いします。

P37 Juliet

O Romeo, Romeo, wherefore art thou Romeo?

Deny thy father and refuse thy name!

Or, if thou wilt not, be but sworn my love,

And I' ll no longer be a Capulet.

続いて、この部分を日本語でお願いします。

ジュリエット：おお、ロミオ、ロミオ！なぜあなたはロミオなの？お父上に背き、その名を捨てておくれ、さもなければ、それができないなら、せめて愛の誓いを、そうしてくれさえしたらもうこの身はキャプレットではない。

家の庭に忍び込んだロミオはこのジュリエットの独白を聞き、次のような言葉を発したのです。ではロミオの言葉を（ ）さん、お願いします。

P39 Romeo

With love' s light wings did I overperched these walls,

For stony limits cannot hold love out,

短いので2回読んでいただけますか？

では日本語も。

ロミオ：恋の軽い翼を借り、その石垣を飛び越えたまでのこと、石の衝立で恋は遮れぬ。

映画のシーンでも最も有名な場面ですね。

そのベランダの下に近く、中庭の奥には2メートルほどの高さの金色のジュリエット像が雨に濡れていました。時の経過で少し黒みがかかった像は、訪れる人が触った部分だけが金色に浮き出て立っています。

こちらが写真に収めようとする、若い女性群が次々と像の前に立ち、友達のカメラにポーズを取っていてなかなか空きません。なかにはジュリエットの手やふくよかな胸に触れている人もいます。「触れば自分の恋を实らせることができる」なんて言い伝えもあるようなのです。

ところで、このベランダもジュリエット像も、戯曲が発表され人気を博した後になって作られたものだといえます。さらに言えば、作者のシェイクスピア自身が、実際にここに来て作品を書いたのではない、歴史上、街にあった物語を原典に作品を書き上げたとのことでした。

本の表紙

これはシェイクスピアの 6 作品目。たぶん日本では最も読まれている作品でしょう。

熱い思いの二人も、ジュリエットのキャプレット家とロミオのモンタギュー家の仲の悪さが因となって悲運につながっていく。二人を密かに結婚させ、助けようとした司祭が仕組んだ試みが、ちょっとした行き違いから、ロミオはジュリエットの眠る墓場で毒薬を飲み自殺、仮死状態から目覚めたジュリエットはロミオの短剣で胸を刺し後を追った。事の真相を知り悲嘆にくれる両家は、ついに和解するとのストーリーでした。

作中には新しい言葉の創造、修辞や洒落が非常に多く長い独白もあります。

「ロミオ、あなたは何故ロミオなの？」この有名なセリフにはじまり、ロミオとジュリエットの愛を語るセリフひとつひとつが poetic 詩的です。これがシェイクスピアの世界なのです。

ここで「ロミオとジュリエット」の最後の部分、倒れているロミオに呼びかけ自殺するジュリエットの刺激的で感動的なシーンと言葉をご紹介します。

ここは長文で中世英語で難しいので日本語訳だけを読んでいただきます。

() さん、できれば少し感情を乗せてどうぞ。

ジュリエット：あ、これは？恋しい方の手に握りしめられた盃ではないのか？

では毒薬で自分のお命を無情にも絶たれたのか！

ああ、意地悪なお方、みんな飲み干してしまうなんて。

少しは残すぐらいの親切があって良さそうなものを！ さ、接吻を！

もしかしたら、この唇にまだ毒薬がいくらか残っていて、それが回生薬となって私を死なせてくれるかもしれぬ。

(ロミオに接吻する←清水が読む)

この唇はまだ温かい！

第一の夜警 (奥から)「案内してくれ、小姓殿。どっちの方だ？」(清水)

ジュリエット：あ、あの人声は？では急がなくては・・・

ありがたいことにここに短剣が！

(ロミオの腰の短剣を取り上げる。そして自分の胸を刺す)(清水)

おまえの鞘はここに。さ、ここで錆び付き、私を死なせておくれ。

(ロミオの死骸の上に倒れ、死ぬ)(清水)

長い文を感情込めて読んでいただきました・・・皆さん拍手をお願いします。

いつ読んでも刺激的で感動的なシーンですね。読む人によってそれぞれ感じ方は違うと思いますが、こんなにも一途な愛にはやはり胸打たれるものがありますね。

3 枚の写真

作品は何回も映画化されてきましたが、1968 年に作られた映画でジュリエットを演じ

たオリビア・ハッセーがとても可愛かった、との評判が高かったですね。

ところで「ロミオとジュリエット」に限らず、小説、戯曲、映画などが世に出て有名になってから、その舞台が作品の内容に合わせて作られる、というケースは多いですよ。

先にご紹介したベランダも映画が有名になってからそれに合せて作られたと言います。「観光のための新たな名所を作る」——いわば“町おこし”が動機になることも多いのですが、それはそれで、人々に夢を創り出してくれてよいのではないか、なんて思った次第です。

街の一角にある古代の円形劇場では、夏になると野外オペラが上演され、世界中から観光客が訪れるといます。雨の中この外壁を見て回りました。途中、広場の地下にある公衆トイレに寄りました。ここでイタリアのトイレ事情を肌身で感じ、さまざまに思うことがあり、旅の終わりに「イタリア最新トイレ事情」なるものをまとめました。

「エッ それって本当なの？」と驚くような面白い話ですが、文学紀行から横道にそれていきますので、受付で 3 ページのコピーをお渡ししております。自宅で笑いながらご覧になってみてください。

ベネチア

「ベニスの商人」の舞台

続いてイタリアの観光地で、やはりシェイクスピアの作品「ベニスの商人」の舞台・ベネチアの写真をご紹介します。

ベネチアの本島にバスや乗用車は乗り入れできません。乗っていたバスは本島にわたる直前の広場で交通税を支払い止まりました。そこからの移動は徒歩または水上交通に頼ることになるのです。

多くの美しい宗教建築、ゴシック建築の傑作、それに gondola 遊覧などベネチアはイタリア有数の観光地となっています。ここに住む人々は住宅が古くなっても新建築は許されない。300 年から 400 年前の建物を、外観を変えないように修理するのだといます。

ベネチアは英語読みだと「ベニス」。シェイクスピアの喜劇「ベニスの商人」で、実際に舞台とされたのはこの島の裁判所くらいですので特に取材はしていませんが、物語では金貸業シャイロックに対する、法学者に扮した裁判官ポーシャの名判決が有名ですよ。

——ベニスの商人アントーニオは友人の結婚資金を、ユダヤ人のシャイロックから借りた。指定された日付までに返すことができなければ、自分の肉 1 ポンドを与えなければならない、との条件だった。アントーニオは簡単に返せるつもりだったが、彼の商船が難破して財産を失い返金できなくなってしまった。

裁判の当日。女性裁判官のポーシャは「肉を切り取ってもよい」との判決をくだした。だがその後続けて言う。

「ただし、契約書にない血を一滴でも流せば、契約違反として全財産を没収する」と。シャイロックは判決に破れ、逆に人の命を奪おうとした罪に問われ死刑になるところ

だったが、刑を免除される代わりにキリスト教に改宗させられることになった——ストーリーの概略です。

島で面白い自然現象に遭遇しました。我々の乗った船が本島に着いたのは午前 9 時少し過ぎ。

写真 4 枚：①訪れようとする建物は満潮の冠水で埋まり、②広場には2 ㍓幅ほどの渡し板の通路が5 0 ㍓ほどの高さの水面に浮かび延々とつながっているのです。ところが、各地を見学後、レストランで昼食を済ませ、再び広場に出ると、③なんと先程の海水は完全に退いていて石畳の地面の上を観光客がそぞろに歩いていたのです。満潮から干潮に入ったのです。

ゴンドラにも乗りました。小運河から大運河への 30 分ほどの周遊はフィルムがいくらあっても足りない(少々大げさな表現ですが・・・また今はデジタルカメラだから実際にはその必要もありませんが)ほどの、美しい景観の連続でした。

船の上でさらにカンツォーネでも聞ければ、つくづく“われベネチアにあれり”なんて旅情に浸ることができそうな、さすがイタリア観光ハイライトの街でした。ここは観光だけなのでこの運河の写真紹介のみで終わります。どこへもこのような運河でつながっているのです。

シニアの休日 in Rome

「全ての道はローマに通ず」「ローマにいたらローマ人のように振る舞うこと」「ローマを見ずして結構というなかれ」・・・最後の言葉は勝手に私が作り替えた諺ですが(正式には『ナポリを見ずして・・・』ですよ)、歴史のあるローマはいろんな小説や戯曲の舞台になってきました。

その中でも 1953 年に製作された映画「ローマの休日」の舞台には観光客が絶えません。シェイクスピアの作品とは関係ありませんが、せっかくなのでイタリアの中心地ローマの一端もご紹介します。(原作：脚本家本ダルトン・トランボ)

ローマを訪れたらやはりバチカン市国も目にしておかなければいけません。国と言っても 0.44 キロ平方キロメートルと独立国としては世界最小。面積は皇居の半分弱ほどにあたるようです。

バチカン宮殿とその前の広場です。法王のミサともなると広場がすべて埋め尽くされるのです。

この上のベランダが法王が説話する場所とのことです。

続いて、コロッセオ、その外側の通路と内側ですね。中心広場ではその昔、猛獣と人間の格闘がなされていた、といます。

後ろ向きにコインを泉へ投げ入れると願いが叶うという言い伝えがあるトレビの泉。映画にも出てきます。夕方の訪問だったのでちょっと神秘的ですが。

さて、映画「ローマの休日」は白黒の画面ながら、いつ見ても新鮮な感動と鑑賞後に残るほのぼのとした情感は、時がたっても変わることがありませんね。

アン王女を演ずるオードリー・ヘップバーンはあくまでキュートだし、新聞記者を

演ずるグレゴリー・ペックもおおらかな人間愛がにじみ出ています。

その映画のロケ地をたどってみたいと「ローマの休日ツアー」に参加しました。定年8年目、初老男のイタリア初訪問です。まさに「シニアの休日 in Rome」としゃれてみた次第です。

スペイン階段に向かいました。午前中は少しの雨でしたが、夕方再度訪れると周囲はすでに夕闇で覆われていました。階段は観光客で大にぎわい。外灯が人々の顔を照らしています。アイスクリームを食べていた王女と新聞記者が再会した石段の付近では恋人たちの抱擁とキスが絶えません。

見学のバスは「真実の口」のある教会で止まりました。建物の入り口にある直径2メートルほどの円盤には海神トリトンの顔が刻まれ、大きな口が開いています。嘘つきは手を入れると抜けなくなる、との伝説がある。

映画でも身分を隠しウソを言っている王女が、こわごわと手を入れ、引きずり込まれそうになるシーンが面白いですね。円盤は古代ローマ時代のマンホールの蓋だったといいます。いつ、誰か知りませんが、よくぞまあ、上手に伝説を創り上げたものだ！と感心したものです。

引き続き、映画に出てくるいくつもの場所を訪れました。パンテオン、フォロ・ロマーノ、王女が入ったレストラン、**新聞記者が住んでいたマルグッタ通りとアパート**。多くの世界的な芸術家たちが住んでいたという小さな通りは、雨に濡れて光り、街路樹は鮮やかな秋の色を映していました。

映画は、おとぎの国の夢物語だけれど、ロマンがあり愛がある。王宮の籠の中の鳥が飛び出し自由な市民の生活を体験した——儀式に追われる王女の窮屈さが想像できるがゆえに、彼女の勇気ある行動に誰もが共感、護衛から逃げるときの応援さえしてあげたい気持ちになるでしょう。

日本の皇室の若い人たちにも共通するものがあるんじゃないかなあ、なんて、昨今の出来事から思うところです。

オートバイ（スクーター）に乗ってローマの街を走る、二人の仲睦まじい対話、スペイン階段での二人、街中での二人、スペイン階段でジェラート（アイスクリーム）を食べるアン王女

一方、新聞記者グレゴリー・ペックの演技も、抑えが効いていて素晴らしいですね。もしこの大スクープを記事にすれば、莫大なお金が転がり込み、記者としての評価も上がったでしょう。でも最後の一线で王女を守ろうとしてすべてを捨てた。ときどき見せる渋い表情がこの映画の品格と情趣を保っています。

たった1日だけの出会いだっただけけれど、誰の目にも二人の間の愛が深まっていくのが見えてきます。王族に帰った王女の「もう戻らないことも出来たのです」との言葉の裏には「彼と一緒にあって」との思いまであっただろうことも推察できます。王女の髪をカットした床屋での仕草やその後パーティでの再会、カメラマンのときにコミカルな演技・・・どれも上品な笑いとユーモアに満ちています。

安易なハッピーエンドとせず、記者とカメラマンの二人が信義をかけて王女を守った、というほろ苦い男の切なさ**最後の記者会見の感動シーン**が、なおさら鑑賞者の

胸に消えない何かを残すのでしょうか。そんな想いを回想しながらの、シニアの「ローマの休日」となったのでした。

「ハムレット」の舞台・デンマークのクロンボー城

デンマークの地図

ここから話はイタリアから北欧のデンマークに飛びます。「ハムレット」の作品の舞台です。ストーリーはご存知の方も多いと思いますが、念のためにあらすじをおさらいしてみますと：

デンマーク王が急死する。王の弟クローディアスは王妃と結婚し、デンマーク王の座に就く。父王の死と母親の早い再婚とで憂いに沈む王子ハムレットは、父の亡霊が夜な夜なクロンボー（エルシノア）城の城壁に現れるという話を聞く。亡霊に会ったハムレットは、実は父の死はクローディアスによる毒殺だったと告げられます。

復讐を誓ったハムレットは狂気を装う。王と王妃はその変貌ぶりに憂慮するが、宰相ポローニウスは、その原因を娘オフィーリアへの実らぬ恋ゆえだと察する。父の命令で探りを入れるオフィーリアを、ハムレットは無下に扱う。あるときハムレットは、母である王妃と会話しているところを隠れて盗み聞きしていたポローニウスを、王と誤って刺殺してしまう。オフィーリアは度重なる悲しみのあまり狂い、やがて溺死する。ポローニアスの息子レアティーズは、父と妹の仇をとろうと怒りを燃やす。

ハムレットの存在に危険を感じた王はレアティーズと結託し、毒剣と毒入りの酒を用意して、ハムレットを剣術試合に招き、秘かに殺そうとする。だが試合のさなか、王妃が毒入りとは知らずに酒を飲んで死に、ハムレットとレアティーズとも試合中に毒剣で傷を負う。死にゆくレアティーズから真相を聞かされたハムレットは、王を殺して復讐を果たした後、事の顛末を語り伝えてくれるよう親友ホレイショーに言い残し、死んでいく……といったストーリーですね。

デンマークの地図

2010年6月の初旬。首都コペンハーゲン中央駅から列車で北上すること約50分。車窓の両側には菜の花畑の黄色と麦畑の青さが遠くまで広がっています。国土の60%が耕作可能という豊かなデンマークの農業事情を映し出しているようでした。

4人が向かい合う形の座席。目の前には太った恰幅のよい紳士が座っていました。旅は道連れ。私は「東京から来たカメラマンです」と自己紹介。「これから『ハムレット』の舞台となったお城に行くんですよ」との私の言葉に彼は言ったのです。「シェイクスピア？ それはいいねえ。でもシェイクスピアはここまで来てはいないんだよ」と驚くべき発言。「デンマーク人の8割はシェイクスピアの訪問を信じてはいるけどね……」と。

事前の資料収集のなかで、作者の真贋や、著者がこのクロンボー城を実際に訪れた

かどうかについて書かれているものもありましたが、まさかこんな「舞台の現場」に向かう列車の中で同じような話を聞くとはいいもませんでした。

「ハムレット」の原書

もう 40 年近くも前のことですが、朝日新聞で世界の文学作品の舞台を訪ねる「名作の旅」なる連載をしていました。その後、連載は上下 2 冊の本にまとめられた。その古い本をまだ東中神にあった昭島図書館から借りてきて『ハムレット』の項を再読してみました。そこでは当時の名記者・白井健策氏も「やっぱりシェイクスピアは城には来ていなかった」と結論づけ、それでもシェイクスピアが新しい一つの世界を作り出した腕に驚嘆を表明していました。

まずは何よりも自分の目で確認してみることだ！私はヘルシンゴー駅から 10 分あまり歩くと、バルト海の岸辺にそびえるクロンボー城（別名エルシノア城）にたどり着きました。

クロンボー城の城壁

入口付近にはデンマークの国旗が高く風になびいています。プラス 1 枚。

城はちょうどロの字の形をして、真ん中は中庭になっています。その石畳を舞台に、夏には野外劇「ハムレット」が上演されるといいます。

私はまずハムレットが父王の亡霊を見たという塔の上に立ちました。

二つある塔の左側。

小説では寒く、暗く、不気味な荒々しい城のイメージで描かれていますが、ラッキーというべきか、アンラッキーというべきか、初夏のスカンジナビアの空はあまりにも青く澄み、吹き抜けていく風も心地よい。

私は物語のイメージを探ろうと、塔から降りると展示室から教会へ、さらに薄暗い地下壕まで歩を運びました。

展示室 シェイクスピアの石像

でも、自分ひとりでの探索では、母親の王妃とハムレットの会話はどこの部屋でなされたのか、ポーニアスの刺された事件現場はどこなのか等はわかりません。そこでその日の責任者らしい髭がカッコイイ男性に聞いてみました。と、両手を広げジェスチャー豊かに話す男性からは予期もしなかった言葉が返ってきたのです。

「Nobody knows!（誰もわかりませんよ）」。氏の話しっぷりからは「そんなこと聞かされたって、そりゃ無理ってもんだぜ！」といった少々くだけた訳が合うでしょう。

だって架空の話の舞台がどこかはわかるはずがない。それでも、これまで書かれてきた訪問記のなかには、案内嬢が「ここがオフィーリアとハムレットが言葉を交わした場所でありまして・・・」と説明された、なんて記述もあります。観光地としてはそこまでサービスしないと訪問客の期待に応えられないからなのでしょうか。

シェイクスピアはデンマーク国民史をもとに『ハムレット』を書き、このクロンボー城の名を不朽にとどめました。他の 3 作品、リア王、マクベス、オセローと併せた 4 大悲劇の中でも最も知られた作品であり、その主人公の性格や発した言葉の解釈に

つについては、長い文学史のなかで、最も論議された、最も魅力的な人物の一人でしょう。

とりわけ人口に膾炙している言葉は、第三幕第一場に出てくる” To be or not to be, that is the question!” でしょう。

To be or not to be, that is the question!

英語を勉強した人だったらそれほど難しい文ではないですよ。でも奥の深い世界的な文学作品です。特に前半部分をどう訳すか、明治時代以降、多くの日本人が悩んだようです。

最も受け入れられている訳は、「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か、死か）それが問題だ」だと思います。中世の英語を翻訳できるような力は私にはとてありませんが、それでも再度、作品を読み、舞台の現場を訪れた自分としてはこの部分を次のように訳してみました。

「何が真実なのか、何が真実でないのか、それを究めるのが最重要課題である」

これは、人間対人間の葛藤の中で、正義と真実を求めて懊悩するハムレットの生命からの叫びなのです。そしてこの重い言葉は、今を生きる私たちにも、人生のあるべき生き方とは何なのか、本当の正義とは何なのか、根本的な問いを投げかけているような気がするのです。

名訳中の名(迷)訳が出てきた？

こんなくそまじめな解釈をしてみた自分ですが、今日の講演のための参考にとネットを見ていたら、これこそ名訳中の名(迷)訳かも、と思われる訳にぶつかりました。

それは大阪弁による日本語訳です。

” To be or not to be, that is the question!”

— やったるか～、あかんか～、ほな～、どないしょ～。 —

これは、まさに紛れもない名訳です。父王の敵をとるというハムレットの深い悩み的心情を、非常によく表現できています。

ネットに書かれていた訳の背景を要約してみますと：

最初の「To be」は、多くの訳者が悩んだように、どんな言葉を当てはめても構わない。たまたまそれが大阪弁で「やったるか」に落ち着いたのに過ぎない。続く「,or not to be」は、「To be」を何と訳すかに関係なく、「あかんか」という大阪弁がシックリと合う。そして、この大阪弁の名訳が名訳たる所以は、後半部分にある。

「that is the question.」は、他の和訳では、殆ど例外なく「それが問題だ」、またはその類似の言葉になっている。

しかし、大阪弁では、「どないしょ～」にした。これは、ハムレットの心情を読み取って、「that is the question.」を、「I'm at a loss what to do.」（一体どうすればいいのか途方に暮れている。）と解釈したからに他ならない。

なるほど、名訳中の名訳とも言われるゆえんでしょう。皆さまだったらどう訳されますでしょうか？ 今日ここに参加された宿題として一日翻訳者になって悩んでみるのも楽しいかもしれませんね。

いずれにしてもこの言葉はシェイクスピアの代名詞みたいなものです。どうぞ今日

のお土産として頭に入れてお持ち帰りください。

そして、どこかで何かの機会に「To be or not to be・・・」または「生きるべきか、死ぬべきか・・・」と口走って見たら、「エッ あなた、あの難しいシェイクスピアの作品を知っているの？」または「あんた、ハムレットに詳しいんだね」ときっと驚かれるに違いありません。

間違いなくあなたの株はグッと上がっていきます。500円、1000円、または5000円くらいまでいかなあ・・・。

今日のつまらなかったかもしれない私の話でも、この言葉一つだけでも覚えて帰っていただければ、話し甲斐があったというものです。

今、NHK 朝ドラ「Come come everybody」の影響で英語の勉強がはやりだしているようです。せっかくなので最後にここで皆さまと一緒にこの英語の勉強をしたいと思えます。私が講師を務めるイキイキニコニコ介護予防教室の講座では、60代、70代、ときに80代の方々が元気に勉強しています。

皆さまも50年、60年前の中学・高校時代の英語の授業を思い出し勇気を出して言ってみましょう。

それでは：

Let's practice this phrase together with me.

Please repeat after me. 私の後に続いて言ってみましょう。

To be or not to be, that is the question!

One more please, Once more. Again, please.

もう一度。

To be or not to be, that is the question!

とても元気ないい英語ですよ。

Very good. Thank you very much for studying English with me.

一緒に英語の勉強をしていただいて大変にありがとうございました。

この言葉の日本語はご自分で訳されるか、ここでご紹介したものを使うかどうかどうぞ自由にしてください。

「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」。この名台詞で知られ、悩める人たちのシンボルともいえる復讐劇「ハムレット」。

「人はなぜ悩むのか」「愛する人とどう向き合うのか」「迷いを超えてどう決断するのか」等、悩み多き現代人の抱えるテーマにも通じています。ハムレットのこの言葉がご自分の人生を開いていく何かのご参考になれば幸いです。

今日取り上げた最後の作品は少々重いテーマになってしまいましたが、舞台となったデンマークは緑豊かな福祉もよく整ったとても暮らしやすく美しい国でした。最後の最後にここでその明るい面を象徴する写真の何枚かをご紹介します。

お城のすぐ近くは海辺の公園になっていて子供たちが遊んでいました。向こう側はもうスウェーデンです。

首都コペンハーゲンの港町。昔は海賊船でならした時代もあったようですが、今は落ち着いた賑やかな港町になっています。

海辺の道路の欄干で愛を語り合う男女。

デンマークは自転車の国です。自転車専用道路が区切られていて通勤に利用されています。

貴族の雰囲気を残す夢を誘うような船。

海辺の石の上に座った人魚の写真も撮りに行ったのですが、あいにく像の手入れ中で幕の向こうに隠れてしまっていました。影が少し透けて見えます。

デンマークはまた童話作家アンデルセンを生んだ国です。オーデンセにある博物館見学にも行きました。博物館入り口にあるアンデルセンと子供たちの像ですね。

博物館の前庭を歩いていると、写真真ん中の左にいるピンクの衣装を着た子が「私たちを撮って！」と声をかけてきたのです。「仲間の女子高生と一緒に」とのことでした。それぞれが本当に可愛いですね。雑誌にも掲載されましたが、せっかくの楽しい写真なので皆さまにもご披露したところです。後ろの赤煉瓦の建物がアンデルセン博物館です。

ここで楽しく明るい気分になったところで私の話を終わらせていただきます。

長時間のご静聴ありがとうございました。

質問会・懇談会

1. Come come everybody の歌の練習
2. 今日の講演に関する質問
3. イタリアのトイレ事情の説明→自宅に帰ってからゆっくりお読みください。
4. 12月11日の横浜市金沢区での講演から：どれかを選ぶ。
 - ① 国際電話をするときの時差からくるギャップ← オリンピックボランティア
 - ② 日本人についてのジョーク←タイタニックの沈没の際の各国の男性の行動
 - ③ ハグ出来なかったマドモアゼル ← パリのオペラ座で
 - ④ 魔法の枕